

| | |
|------------------|---|
| Title | The operant behavioral approach in the analysis of drug effects |
| Sub Title | オペラント行動による薬物効果の分析 |
| Author | 安東, 潔(Ando, Kiyoshi) |
| Publisher | 慶應義塾大学大学院社会学研究科 |
| Publication year | 1981 |
| Jtitle | 慶應義塾大学大学院社会学研究科紀要：社会学心理学教育学 (Studies in sociology, psychology and education). No.21 (1981.) |
| JaLC DOI | |
| Abstract | |
| Notes | 学事報告：学位授与者氏名及び論文題目：博士 |
| Genre | Departmental Bulletin Paper |
| URL | https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN0006957X-00000021-0098 |

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

学 事 報 告

学位授与者氏名および論文題目

修 士 (昭和55年3月)

社会学修士 (社会学専攻のもの)

- 第 386 号 出口 裕啓 言語的対立からみた少数民族問題 —理論的考察とカナダ・ケベックの事例—
- 第 387 号 秋元真理子 消費者イノベーターの研究 —主婦のライフスタイル調査による分析結果—
- 第 388 号 新井 正明 家族国家論
- 第 389 号 稲生由美子 生活の質評価手法に関する考察
- 第 390 号 国府田文則 大都市圏周辺都市をめぐる人口移動とその地域構造の研究 —草加市における暫居城の析出の試み—
- 第 391 号 鈴木 秀一 理解社会学と西欧ニヒリズム —M・ヴェーバーの科学論—
- 第 392 号 長尾 真理 「批判社会学」序説 —J・ハバースのコミュニケーション理論をめぐる—
- 第 393 号 西河 正行 わが国大学組織における学生の『自我同一性確立過程』の長期的追跡研究について
- 第 394 号 藤本みどり Lourdes の巡礼 —その制度化を中心として—
- 第 395 号 村上 綱実 倫理的要素と社会秩序

- 第 396 号 吉沢 夏子 A・シュッツの生活世界の構成 —関連性構造と行為における未来志向—

文学修士 (心理学専攻のもの)

- 第 397 号 菅野理樹夫 OSA—UCSにおける色差と色調成分の検討
- 第 398 号 渡辺 利夫 前額平行面における平行並木と距離並木
- 第 399 号 久東 光代 言語生成過程にみる認識構造の発達の考察 (作文の分析を中心として)
- 第 400 号 三原 光雄 デンショバトにおける心拍条件づけの両眼間転移

教育学修士 (教育学専攻のもの)

- 第 401 号 森野 衛 初期ニーチェ思想における教養の概念
- 第 402 号 東 敏徳 「こども論」研究
- 第 403 号 坂上 道子 善さ判断と利他的動機
- 第 404 号 烏倉 吉子 小学校児童における学習障害について
- 第 405 号 藤田 俊一 エソロジーについての考察
- 第 406 号 山本 丘 ヒトにおける概念とその心的表象形式 —発生的アプローチへの試論—
- 第 407 号 米山 光儀 タカクラ・テルと自由大学運動 —上田自由大学を中心として—

博士 (甲)

文学博士

- 第 609 号 安東 潔 (55年9月30日)
慶應義塾大学大学院社会学研究科
(昭和13年4月1日生)

The Operant Behavioral Approach
in the Analysis of Drug Effects

(オペラント行動による薬物効果分析)

[論文審査担当者]

主 査 小 川 隆

(慶應義塾大学文学部教授 大学院社会学研究科委員 文学博士)

副 査 佐 藤 方 哉

(慶應義塾大学文学部教授 大学院社会学研究科委員 文学博士)

副 査 小 谷 津 孝 明

(慶應義塾大学文学部助教授 文学博士)

〔論文審査の要旨〕

実験的行動分析を薬物効果、薬物弁別の研究に応用する試みは近来、米国を中心に世界的に拡げられた趨勢であるが、わが国では未だ途についたばかりで、研究論文も僅である。本論文はわが国ではじめて斯方面の実験的研究を組織的に行ったものである。

論文は四部からなり、その構成はⅠ 序論、Ⅱ 強化スケジュール下の行動に及ぶ薬物効果の実験、Ⅲ 刺激性制御による薬物弁別の実験、Ⅳ 一般論議である。

Ⅰでは、精神薬理学が近来、向精神薬などの多くの発見によって新しい局面を迎え、オペラント条件づけによる行動の分析（実験的行動分析）という新しい手法の導入によって行動薬理学として展開した所以が概括されている。また、Ⅱ、Ⅲで行う実験計画の概略と用いられる薬物の薬理的特性が述べられている。

Ⅱではラットを被験体とし、向精神薬の効果を調べる上に有効な強化スケジュールとして想定されたDRLスケジュールの一般な吟味実験が先立ってなされたが、オペラント行動の獲得過程を分析した結果、DRL20"が、反応間時隔（IRT）、反応率、強化率の指標から検討して、比較的短期間の訓練で安定した基本線に到達することが示された。そこでDRL20"スケジュール下の行動が15種にわたる向精神薬の投与によって、それぞれどのような影響をうけるかが比較実験されたが、amphetamine などの中枢神経興奮薬により反応率の上昇、IRT分布の頂点の短縮が、diazepam などの抗不安薬によりIRT分布幅の増大がみられた。以上の結果からDRL20"スケジュール下の行動が薬物によって特徴的な影響をうけることが明にされた。

Ⅲではラットを被験体とし単一レバー押しの場合とアカゲザルを被験体として対レバー選択押しの場合につき刺激性制御による薬物弁別の実験がなされた。薬物の静脈内投与という新しい手法により、amphetamine 投与後のラットの反応を強化、生理食塩水投与後の反応を消去した結果、amphetamine 投与後の反応率は上昇し、生理食塩水投与後の反応率は低下することとなり、弁別刺激として薬物が刺激性制御の機能を果すことが明となった。同様の手法により ethylalcohol と生理食塩水との間にもオペラント弁別の成立が確かめられた。次で対レバーのアカゲザルの選択反応の実験に入り、一方のレバー押しは cocaine の静脈内投与、他方のレバー押しは生理食塩水投与によって刺激性制御の事実を確かめた。これらのサルに morphine, amphetamine な

どの薬物を投与して般化テストを行った結果、これらの薬物に対しては cocaine 側のレバー押しが、これに対し chlorpromazine, pentobarbital-Na, ethylalcohol, LSD-25 などを投与した場合は生理食塩水側のレバー押しがなされた。これによってそれぞれの薬物が弁別刺激特性の上で cocaine に類似しているか否かを決定し得ることが明らかとなった。

Ⅳでは以上の実験的研究につき、それぞれの方法の特徴と制限とを比較考察し乍ら、薬物効果、薬物弁別を調べる上に、DRLスケジュール、刺激性制御下のオペラント行動が安定した基本線となり、有効な機能を果すことが概括されている。

本論文は各種向精神薬について実験的行動分析による行動薬理学的研究を行い、斯方面に新たな成果を加えたばかりでなく、薬物効果、薬物弁別を通じて実験的行動分析の諸手法を比較・考察する上に貴重な資料を提供し、弁別オペラントの研究に多くの示唆を与えている。今後追及さるべき未解決の問題を残しているとはいえ、本研究の意義は高く評価されるものといえる。著者は本論文によって文学博士の称号を受けるに適格と認める。

文学博士

第610号 河嶋 孝 (55年9月30日)

(昭和12年1月19日生)

パヴロフ型条件づけとオペラント条件づけの交互作用に関する研究

〔論文審査担当者〕

主査 小川 隆

(慶應義塾大学文学部教授 大学院社会学研究科委員 文学博士)

副査 佐藤 方哉

(慶應義塾大学文学部教授 大学院社会学研究科委員 文学博士)

副査 小谷津 孝明

(慶應義塾大学文学部助教 文学博士)

〔論文審査の要旨〕

オペラント条件づけの成分としてパヴロフ型条件づけが働くという分析は、回避訓練の実験に沿って検討されて来たが、近来、報酬訓練の実験についてもとり上げられている。回避訓練では刺激—反応、強化—反応の間の反応の差異が問題であったが、報酬訓練では、反応—強